

# 「魂の殺害者」とは誰か

## －シュレーバーの『ある神経病者の回想録』における迫害の問題－

### Wer ist der Seelenmörder? – Über den Verfolgungswahn bei D. P. Schrebers „Denkwürdigkeiten eines Nervenkranken“

熊谷 哲哉

#### はじめに

19世紀末ドイツで、高等裁判所民事部部長を務めたダニエル・パウル・シュレーバー(1842～1911)は、1893年以降、心身の不調を訴えライプツィヒ大学の精神科医フレックシヒのもとを訪れる。その後ドレスデン近郊、ピルナのゾンネンシュタイン精神病院に約8年入院し、1902年に退院している。彼はこの長期に渡る入院生活での経験をまとめて、1903年『ある神経病者の回想録』(以下、『回想録』)を刊行した<sup>1</sup>。彼が自らいう「神経病」とは、神および主治医フレックシヒによる「神経接続」を通じて思考をかき乱され、肉体を傷つけられ、最終的には神の妻となるべく女性の身体へ変えられるという一連の症状である。この病の意味と新たな世界観についての考えをまとめたのが『回想録』である。

シュレーバーの『回想録』は、出版当時はほとんど注目されなかったが、20世紀初頭にフロイトやユングらによって分析され、パラノイアの代表的な症例として、精神分析理論が形成される出発点のひとつとなった。20世紀後半においては、ラカンやドゥルーズ、カネッティやキトラーなど現代思想の文脈で読まれ、統合失調症の症例としてのみならず、現代社会や文化を検討する際の、重要なテキストとされている。しかしいまだシュレーバーの『回想録』そのものの思想的・文化的な価値については、十分な研究がなされていない。本稿では、シュレーバー自身の言葉に注目し、彼がどのような時代背景のもとで、自らの世界観を構築し、著作を書き上げたのかを浮かび上がらせたい。

シュレーバーの『回想録』は、いわゆる迫害妄想に貫かれている。彼を迫害する者として第一に挙げられているのは、『回想録』冒頭の公開質問状の名宛人である、パウル・エーミール・フレックシヒである。しかし一方で、父親の整形外科医で教育思想家としても知られたダニエル・ゴットロープ・モーリツ・シュレーバーの教育こそが問題であったという立場も優勢である。本稿では、『回想録』における迫害体験について検討する。シュレーバーのいう迫害—すなわち「魂の殺害」—とは、一体誰によってなされたどのような行為だったのか。また、なぜシュレーバーは、長い入院生活を過ごしたゾンネンシュ

タイン精神病院での主治医ヴェーバーではなく、僅かな期間<sup>2</sup>しか接触をもたなかったはずのフレックシヒを迫害者として名指すことになったのだろうか。

はじめに、「魂の殺害」という用語についてシュレーバーの述べているところを分析する。次に、先行研究において、迫害者と考えられてきた、父親モーリツ・シュレーバーの影響について検討する。さらに『回想録』において唯一実際に名前を挙げられている人物であるフレックシヒに関しても、シュレーバーが彼についてどのような感情を抱いていたのか、また彼自身がシュレーバーや他の患者たちにどのような治療をしていたのかを検証することで、『回想録』における迫害の意味を探りたい。

## 1. 魂の殺害とは

魂の殺害 (Seelenmord) という用語について、シュレーバー自身の説明を見てみよう。シュレーバーは『回想録』第2章の冒頭で、「奇跡に満ちた構築物」であるこの世界全体―彼の言葉で言えば「世界秩序」―が混乱に陥った原因として「魂の殺害」に言及する。

はじめにこのことについて前置きとして述べておきたいのだが、このようななりゆきの初めの発端は、おそらく18世紀まで遡る。そして一方ではフレックシヒとシュレーバー（たぶんこの家系の特定の誰かに限られるものではない）という名前と、他方では魂の殺害という概念が大きな役割を演じているのである。

後者、すなわち魂の殺害ということから始める。何らかのやり方で他者の魂を奪ったり、その魂を犠牲にして、長い寿命を得たり、死後も持続するような利益を手に入れることができるという観念が、多くの民族の伝説や詩のなかに流布している。その例としては、ゲーテの『ファウスト』、バイロン卿の『マンフレッド』、ヴェーバーの『魔弾の射手』などの例を挙げるにとどめておこう。(中略)

さて、私と話す声によれば、私が神と接触を持ち始めたころ（1894年3月中旬）から現在にいたるまで、何者かによって、「魂の殺害」が行われたという事実こそが、神の国に降りかかった危機の原因であると、毎日毎日言い張ってきたのだが、その際、以前はフレックシヒが魂の殺害の首謀者として挙げられていたのに、いまでは、かなり以前から、その関係が意図的に逆転され、私を魂の殺害を行った者として「描き出す」ことが、もくろまれているのだ。そこで私は、いつかかなり前の世代において、フレックシヒ家とシュレーバー家の間に、魂の殺害と名づけるべき出来事が起こったのだらうと推測し、そしてまた、私の神経病が治療困難であると思われたころに、失敗したとはいえ、魂の殺害が、何者かによって、私に対して企てられたということを、その後の経過からも、確信するのである。(強調は原著者) (DW 22-23)

このように、魂の殺害とは、世界秩序が混乱した根本的な原因のひとつであり、シュレーバー家・フレックシヒ家両家の祖先にも関わる問題であり、さらに具体的には、他人の魂を奪うことによって、寿命を伸ばしたり、死後も続くような利益を得たりすることだとされている。ここでシュレーバーが述べていることを見るかぎりには、「魂の殺害」とは、過去に起こったこと、あるいはシュレーバー本人とは無関係に起こった事件でしかないようにも読める。だが、別の箇所での説明から、魂の殺害とは、シュレーバー家とフレックシヒ家との間で何代にも続いてきた、神の国における勢力争いの帰結として、これから生じるかもしれない危険—そして神自身もまだその危険の大きさに気づかないような危険であると考えられている。

いずれにせよ確かなのは、魂の殺害が今後何らかの形で彼に加えられるかもしれない迫害の不安を表しており、またそれが神および世界秩序に混乱を生じさせ、自らを女性化させることになった原因の一つだということである。魂の殺害という概念が、実際のところどのような行為なのか、という点はあまりに不明瞭である。そこで多くの研究者は、魂の殺害を犯した、あるいは企てている者、すなわちシュレーバーの表明する迫害の不安が、一体誰によってもたらされたのかを追求することになったと考えられる。

## 2. 迫害者とは父親か—モーリツ・シュレーバー批判と実像—

フロイトは、論文「自伝的に記述されたパラノイア（妄想性痴呆）の一症例に関する精神分析的研究」（1911年）において、シュレーバーのフレックシヒへの執着を、同性愛的リビドーの爆発であると考えている。そしてその原因を、「医者を通じて兄弟または父親を想起させられ、医者の中に、兄弟または父親を再発見した」<sup>3</sup> ことであると述べている。さらにフロイトは、シュレーバーの『回想録』における敵対勢力である神とフレックシヒは、同じものが分割された状態であると考え、神もまた、シュレーバーの家族関係の中に位置づけられるとする。

迫害者フレックシヒがかつて愛された人物であれば、神もまた同様に愛された、いとおそらくより重要な人物が回帰したものにほかなるまい。

この妥当と思われる考えをより進めると、この他の人物が父親以外の何者でもなく、そしてフレックシヒは（望むなら年長の）兄弟の役割へと押しやられることになる、と言わざるを得ない。あの多大な反抗を引き起こした患者の女性的幻想の根源は、それゆえ性愛的な強度へと高められた父や兄への思慕であったのだろう。ここから兄は転移によって医師フレックシヒへと移行し、この転移の父への還元とともに、闘争の均衡が得られたのだ<sup>4</sup>。

フロイトは神を父親、フレックシヒを兄に当てはめている。フロイト自身はシュレーバー家についてはあまり詳しく知っていたわけではないので、ここでシュレーバーに早世した兄がいたのではないかと推測は正鵠を得ていると言わざるを得ない<sup>5</sup>。フロイトはこのあと主要な迫害者であった神＝父親とシュレーバーとの関係を軸に分析を進めていく。フロイトの分析は、あくまで父と息子の葛藤、そしてその理論化を中心としている。この神＝父親という図式、そしてフレックシヒよりも父親を主要な迫害者とする見解は、のちの研究者にも受け継がれることになる。

父親を主要な迫害者、すなわち「魂の殺害者」とする研究者のうち、代表的な人物といえるのが、ニーダーランドとシャッツマンである。ニーダーランドは、父親モーリツ・シュレーバーの教育に注目し、その権威主義的性格を厳しく批判し、自らの子どもたちを、拘束具を使って矯正し、「完全な従属と服従の状態に置かれた」新しい人間へと作り変えようとした人物であると述べている<sup>6</sup>。ニーダーランドと同様に、モーリツ・シュレーバーの著作を読んだシャッツマンは、文字通り『魂の殺害者』という著作の中で、整形外科医であったモーリツ・シュレーバーの開発した「拘束具」と、息子パウル・シュレーバーの『回想録』における迫害体験とが対応していることを示そうと試みた。

息子が外的な声に感じる頭痛は、父の作った「頭部固定器」一顎の骨の形成不全を予防するための、ヘルメット型の革製バンドを想起したためだと断定されてしまう。<sup>7</sup> たしかにこのように、父の作った骨格整形のための器具は、どれも息子の痛みや苦しみの根源となっているかのようにも読むことはできる。

このような解釈は今に至るまで、シュレーバーの発病の原因として当然の事のように語られている。しかし、父親によるサディスティックな教育こそがシュレーバーの精神を破壊した（＝魂を殺害した）という見方に対しては、近年批判的な態度を取る論者も多い。

シュレーバーの父親、ダニエル・ゴットロープ・モーリツ・シュレーバーは、1806年生まれ、整形外科医として活動する傍ら、徒手体操・器械体操（総称してトゥルネン Turnen と呼ばれる）の普及に努めた人物である。彼は体操家の団体の代表を務めるだけでなく、ライプツィヒ市の要職にも任命される地域の名士であった。彼は整形外科医として意志力によって精神と身体を活性化し、より高度な両者の結合を目指すという保健思想の持ち主であった<sup>8</sup>。最初の著作『健康の書 Das Buch der Gesundheit』（1839年）をはじめ、体操療法や育児法、教育論など広い分野についての著作を残し、家庭雑誌 *Gartenlaube* に寄稿するなど、教育評論家としても活動していた<sup>9</sup>。

先に見たように、モーリツ・シュレーバーの思想は、身体の拘束や父への服従を強要したサディズムであると言われがちであるが、そのような見方はあまりに偏見に満ちている。シャッツマンが「頭部締め付け器」の根源とした、革のバンドも、上下の顎の骨が、

アンバランスに成長するのを防ぐためのものであり、しじゅう装着していなければならないのではなく、「夜のみ、20ヶ月使用する」という説明がある<sup>10</sup>。さらにイスラエルスも指摘するように、モーリツ・シュレーバーが考案した骨格矯正器具は、あくまで骨格異常の児童に用いられるものであり、日常的な使用—あるいは息子たちへの強要—を視野に入れたものではない<sup>11</sup>。むしろシュレーバー本人は、体の一部だけを重点的に動かすための器具や体操療法士の助力に頼るスウェーデン式医療体操には批判的であり、誰もがひとりで、どこでもできる体操を目指していたのだ<sup>12</sup>。

彼のもっとも著名な著作である『医療的室内体操』（1855年）には、さまざまな疾病や症候に対する、体操や代替療法—水療法、水洗腸、乾布摩擦、マッサージなど—による治療方法が多数収録されている。モーリツ・シュレーバーは、寒中でも氷を割って湖に浸かるような、かなり熱心な水療法の実践者だった<sup>13</sup>。水療法や日光浴、乾布摩擦のような代替医療は、決して奇異なものではなく、当時話題となっていたクナイプの水療法やホメオパティのように、人々の期待を集めていたし、大学における医学教育にも取り入れられ始めていた<sup>14</sup>。『医療的室内体操』は、実際に非常に多くの読者を得ていた<sup>15</sup>。イスラエルスによれば、フライシャー社からは32刷20万部、他の会社から出ていた版もあわせれば30万部売れたらしい<sup>16</sup>。

父親の体操による健康法は、トラウマというよりはむしろ息子にとっては重要な参考文献として用いられていたとも考えられる。パウル・シュレーバーは『回想録』の中で幾度か父親や、父親の著作に言及している。たとえば、父親はある種の医学的な助言をする人物として挙げられている<sup>17</sup>。また、別の箇所にも、父親の健康法の影響を見ることができる。

庭で散歩している時も部屋にとどまっているときも、私は暑熱奇跡と寒冷奇跡（Hitze- und Kältewunder）をほとんど毎日、そして今でも感じている。これらの奇跡は、魂の官能的愉悦によって生じた、体の中の自然な気持ちの良さを阻害するため、つまりたとえば足を冷たく、顔を熱くするといった具合に生じるものであった。（中略）私は若い頃から暑さや寒さに耐えることには慣れていたので、このような奇跡が生じたところでいつも大したことはなかったのだが、ベッドに横になっているときに足が奇跡によって冷たくされてしまうことが数えられないほど起こったのだが、この場合は例外である。反対に私が自ら熱さや寒さを求めなければならないこともあった。（DW 172）

ここで言われていることは、—シャッツマンが指摘するように—かつてやらされた寒中

水泳の思い出が回帰してきたということではない。逆に、彼が思う、しかるべき場所の熱さや冷たさ（いわば頭寒足熱の状態）が、奇跡によって混乱させられてしまっているため、自分が親しんできた健康法にのっとり「冬にほとんど手が硬直してしまうくらい数分間凍りついた樹に手をあてたり、雪のかたまりをつかんだり」（DW 172）することで、身体の均衡を取り戻そうとしたのだろう。

このようにいくつかの例から、パウル・シュレーバーにおいて父の思想は、クレペリンの精神医学の教科書などと同様に、彼の知的な拠り所であったと考えることができる。

### 3. もう一人の迫害者、フレックシヒ

父親が迫害者ではないということは、「魂の殺害」の首謀者はやはりもう一人の人物だったということになるのだろうか。つぎに、モーリツ・シュレーバーと並んでパウル・シュレーバーの迫害者、すなわち「魂の殺害者」として名指されている、最初の主治医パウル・エーミール・フレックシヒについて、その生涯と学説、および人物像とシュレーバーへの影響について考えてみよう。

現在でも「神経解剖学の父」として著名なパウル・エーミール・フレックシヒ（1847～1929）は、ツヴィッカウの出身で医学部を卒業後、新生児の脳を解剖し、神経の発達過程を観察することで、神経解剖学研究の分野で高く評価されるようになっていく。1877年には、ロマン主義的な魂の精神医学者であったハインロート<sup>18</sup>の死（1843年）以来長年空席となっていた、ライプツィヒ大学医学部精神科の准教授に任命された。ロターヌがいうように、「突如として、フレックシヒが任命されたことによって、魂の伝統は終焉を迎え、脳が支配する時代が到来した」<sup>19</sup>のである。

1882年3月に、教授に就任したフレックシヒは、就任記念講演の中で、あらゆる精神錯乱や精神状態の病変は、「確信を持ってあるいは蓋然性をもって、身体の、とりわけ脳の異常な状態へと還元されうる」<sup>20</sup>と、自らの立場を鮮明に表現している。すなわちフレックシヒは、彼以前の精神科教授たちとは反対に、あらゆる精神的な障害を、脳の器質的・機能的な障害が原因だと考えたのである。同じ年の5月に、ついにフレックシヒはライプツィヒ大学医学部附属の病院を開設する。

この病院に、のちにパウル・シュレーバーが入院することになるわけだが、奇妙なことにフレックシヒは自伝のなかで、ほとんど病院での治療実践について言及していない。他の精神医学史の文献で言われるように、彼は精神科医として患者の治療に当たることをあまり重視していなかったのかもしれない<sup>21</sup>。フレックシヒの人物像については、精神医学史および精神分析の言説の変遷からシュレーバー研究を試みた、ブッセが、フレックシヒの弟子の証言などを用いて、詳細に綴っている<sup>22</sup>。太い首と堂々たる体躯を誇り、いつも

同じ黒い外套とゴムのオーバーシューズを身につけていたという。外見だけでなく、性格の面でも癖の強い人物だったようで、彼に反感を抱く者は多数いたのだろうと考えられる<sup>23</sup>。

ごくわずかな弟子や家族にしか知られていなかったがフレックシヒは、躁鬱型の気質だったという。弟子たちは調子のいい時も悪い時も知っていた。態度の変転は、けっして単なる気分の問題ではなく、何年も続くような不機嫌状態なのである。また、無気力と嗜眠に陥ることもあり、講義がなんとかできてほとんど聞き取れないほどであったり、友人と話すときや試験のときですら眠り込んでしまうことがあり、医院は実質的に主任医長に任せきりにすることもあった<sup>24</sup>。

少なくとも彼の弟子のプファイファーが伝えているのは、フレックシヒが50代を超えてからのことだろうとブッセは推測している。しかしプファイファーはフレックシヒの略歴を読んだ際に、「病院長に任命されたのちに、神経性の虚脱状態に陥ったが、彼は研究旅行として旅をする機会を得て、そこで数週間に及ぶ不眠の後、再び眠れるようになった」という記述を見つけている<sup>25</sup>。これらの証拠から、フレックシヒ自身が躁鬱や不眠という形で、若い頃から精神的に病んでいたのではないかと推測できる。このことも何らかの形でシュレーバーの『回想録』における記述と関係をもっているはずである。

では、実際にフレックシヒはシュレーバーに対してどのような診断をしていたのだろうか。フレックシヒは、自らの開発したてんかんの新たな治療法—フレックシヒ療法・Flechsigt-Kur—について自伝で言及している<sup>26</sup>。この方法は、簡単にいえば、患者にはじめは大量のアヘンを与え、6週間たったらアヘンの投与を急に中断し、代わりに臭化カリを与えるという、ある種のショック療法であったという。ブッセの報告するところによれば、この「フレックシヒ療法」は、論文には効果のあるように書かれていたものの、患者は治癒したわけではなく、死亡した事例もあったという。そして他の医師たちも同様に、患者を用いた臨床実験を日常的におこなっており、その際に死亡した者も少なからずいたはずである。

この「フレックシヒ療法」以外にも、彼が開発した「画期的な」しかし入院患者たちにとっては恐ろしかったであろう治療法が、ヒステリー患者に対する卵巣除去手術である。この治療法は、やはり彼の自伝にも記載されている。彼自身が考案したものではないが、フレックシヒは、内的な生殖器官の触知しうる病変がある場合には、卵巣を除去することで、不快な状態をおおむねしのぐことができるようになると考えていた<sup>27</sup>。この治療法については、フレックシヒも二本の論文で報告している。実際にライブツィヒの病院で手術が行われたと考えられる。

シュレーバーに「フレックシヒ療法」が適用されたかどうかは定かではないし、シュ

レーバーがフレックシヒの去勢手術について知っていて、自らに適用されるのではないかと不安を抱いていた<sup>28</sup>ということは考えられなくもないが、それ以外にも、シュレーバーはフレックシヒの治療法に、少なからぬ疑義を抱いていた。

私はすでに発病した当時から今も変わらない意見なのだが、神経科医というものはおそらく多くの患者を前に必要に迫られた嘘をつかざるを得ないのだろうし、いつも細心の注意をはらって用いられるべきであるが、私に対しては、そのような嘘が当を得たものであったことはかつて一度もなかった。というのも、人は私をすぐに、並外れて鋭い悟性と鋭い観察眼を備えた精神的に秀でた人間と認めざるを得なくなるからだ。例えばフレックシヒ教授が私の病を単に臭化カリ中毒であると判断しようとするとき、私はそれを必要に迫られた嘘とみなさざるを得ない。私はすでにS（訳注：ゾンネンベルクはフレックシヒのもとを訪れる前にシュレーバーが療養していた施設）の衛生顧問官R博士の治療を受けていたが、フレックシヒ博士は臭化カリ中毒をR博士のせいにするのである。（強調は原著者）（DW 35）

バウマイアーが収集した病歴簿にもあるように、シュレーバーは二度目の入院の際に、「もうすぐ死んでしまう」と言い、脳軟化症の徴候を訴えている。また、最初の入院の際には、ヨードカリを処方され、「梅毒の疑いがある。彼の妻が二回流産している」<sup>29</sup>と記載されていることから、シュレーバーの病は、フレックシヒが診断したように、「パラノイア（Paranoia）」でも「心気症（Hypochondrie）」でも、そして「臭化カリ中毒（Blomvergiftung）」でもなかったのではないか。シュレーバーの本来の病名が梅毒である、というのは、もはや研究者の間では定説となっている<sup>30</sup>。

シュレーバー本人は、自分が梅毒であるとは認めていないだろうが、兄グスタフ・シュレーバーが梅毒による進行性麻痺を患い、脳軟化症の進行に伴い自殺したことから、自分自身が同じような病気にかかってしまうことの恐怖を感じていたのだろう<sup>31</sup>。しかしなぜ、フレックシヒはシュレーバーを梅毒と診断し、効果があるとされたヨードカリを投与しなかったのだろうか。ブッセは、フレックシヒがなぜ嘘の記録を残した（当時の文部省の記録を見ても、梅毒患者のシュレーバーについての記載はない）のかについて、「フレックシヒは、開設からまもなく野心的に経営を進めていた“精神科”の院長として、自らを演出したかったはずだ。そうすると、医院の統計の中で、あまり多くの単なる身体的な症状を示す患者ばかり増えてしまうのは具合が悪いと考えたのではないか」と述べている。

いずれにせよ、シュレーバーがフレックシヒの診断や治療に不信感を抱いていたことは想像に難くない。「フレックシヒ療法」や「卵巣除去手術」について彼が何も知らなかつ

たにせよ、フレックシヒを「魂の殺害」の首謀者の一人として指名するにいたった理由の一つはここにあるといえよう。

#### 4. 『回想録』におけるフレックシヒと「魂の殺害」

最後にシュレーバーの『回想録』の中で、もう一度「魂の殺害」の意味について考えてみたい。前節において迫害者であることがある程度確定的になったフレックシヒだが、『回想録』の前半部においては、最重要の登場人物として頻繁に言及されている。そしてここまで論じてきたように、おそらくシュレーバーにとって、彼の迫害妄想の中心、すなわち魂の殺害を犯したものとして考えられている。だが、そのために、先行研究の多くにおいて一たとえばフロイトの解釈がそうであるように一、フレックシヒと神とは、同一のものとして考えられがちである。この節では、シュレーバー『回想録』におけるフレックシヒと神の関係を整理する。

フレックシヒと神とが同一視される最大の原因と考えられるのが、フレックシヒの用語や考え方がシュレーバーに大きな影響を与えているということだろう<sup>32</sup>。シュレーバーは、『回想録』の中でヘッケルやエドゥアルト・フォン・ハルトマンなど同時代の自然科学や哲学、心霊研究に強い関心をいただき、自分が置かれた状況を理解するために、手元にある書物を熟読した<sup>33</sup>。医学書に関しても、シュレーバー自身はクレペリンの精神医学の教科書を参照している（DW 78. 注 42）が、フレックシヒの著作に目を通していたとも考えられる。フレックシヒの神経解剖学がシュレーバーの用語に影響を与えていることの最も分かりやすい証拠は、『回想録』第1章冒頭の文章に見ることができる。「人間の魂は体の中の神経に宿っている」（DW 6）とシュレーバーは述べる。これはフレックシヒの典型的な、唯物主義的な思考と重なる。フレックシヒは「魂を身体機能として、魂の現象を、生命の現象として、生命的な事象の表現として説明」（強調は原著者）することを、自らの神経解剖学の課題として強調している<sup>34</sup>。このような観点はシュレーバーと共通している。

また、フレックシヒの影響は、神の性質についての記述にも現れている。シュレーバーは、神は生きた人間に近づくことができないという。人間の神経は、神の神経を引きつける力を持っているからだ。だから神は死者に近づき「光線の力を使って神経を身体から引き出し、自らの方へ手繰り寄せ、新たな天上の生へと蘇らせる」（DW 12）のだ。

フレックシヒは自伝においてこのように記述している。

病理学研究所には、たくさんの新生児の死体が届くので、私はこの簡単に手に入る素材を使って、脳の構造について研究しようと決心した。（強調は引用者）<sup>35</sup>

神経解剖学者フレックシヒにとって、赤ん坊の死体は「素材」でしかない。そしてそのような素材として、なるべく新鮮な脳、解剖のためには通常死後 24 時間以内、しばしば 12 時間以内の死体を用意し、すみやかに処置をするべきであることをフレックシヒは推奨している<sup>36</sup>。これは死体に近づいて神経を抜き取る（＝頭蓋骨を切り開き、処理をして、脳神経を解剖する）神の姿によく似ている。

このような記述から、フレックシヒと神が同一視されてきた。たしかにフレックシヒの用語や考えは、シュレーバーが『回想録』に書いた、神および神の国の制度に多大な影響を与えている。部分的に、両者のイメージが混じり合っているところもあるだろう。しかし、『回想録』の記述を見るかぎり、やはりフレックシヒはあくまで神とは別の存在である。フレックシヒはシュレーバーの主治医でもある。シュレーバーは神の国とは、死後の魂が集められる場であるとしているが、主治医であるフレックシヒはなぜ生きながらにして、神の世界に参入し、神と同じ能力である神経接続（特別な能力を持つ人間に近づき、靈感を授ける力）によって、シュレーバーを迫害することになったのだろうか。生きながら、生前の自我同一性を保持しながら、別の魂として行動できる能力の存在（DW 16）については、シュレーバー自身が言及している。フレックシヒは、神の国を脅かす存在として勢力を拡大し、「魂の統率者」（DW 113）とよばれるようになる。後にフレックシヒの勢力は次第に衰えてゆく。この点も彼が神とは同一物ではないと考えられる根拠である。フレックシヒおよび「魂の殺害」についてのシュレーバーの言及は、『回想録』の前半部に集中している。フレックシヒの魂は神との争いの果てに、ほとんど消滅することになる。分割を繰り返し、膨大な数に達していたはずのフレックシヒの魂は、「人間的な知性をかなりの程度保っていた」のだが、何年か過ぎるうちに、「その知性を次第に失ってゆき、その結果、今ではもう長いことほとんど自己意識のみすばらしいほどの残滓がわずかにあるくらい」（DW 124）になってしまった。最終的には「…フレックシヒの魂は、一つあるいは二つの姿で、フォン・W の魂はわずか一つの姿が残るのみとなった」（DW 192）という。

シュレーバーの描く神の国では、死者の魂が光線として神の一部分を構成する。この原則から考えれば、かつて神の国に敵対し、光線の統率者となっていたフレックシヒは、光線＝他者の言葉や記憶を多数集めた存在、すなわち世間で認められた人物という実際のフレックシヒの姿と重なる<sup>37</sup>。だが、大きな力を持っていたはずのフレックシヒは、後にほとんど消滅する。もちろん現実のフレックシヒはそのままライブツィヒに存在し続けたのであるが。この変化はいったいどういうことなのだろうか。

『回想録』冒頭には、フレックシヒへの公開質問状が収録されているが、そこにはシュレーバーの感情が明瞭に綴られている。

…このようなこと、すなわち私が以前には誤ったかたちで全てあなたのせいであると考えざるを得ないと思っていた全ては、—とりわけ疑いもなく私の体を傷つけるような作用は一単にあの「試練を受けた魂」の責任でしかないと考えられるでしょう。そうであるとすれば、あなたの人格に汚点を残すようなことはいっさい何もない事になるでしょう。ただあなたが、多くの医者と同じように、誘惑に打ち勝つことができず、あなたの治療を期待している患者に対して、突如として訪れた高度に学問的な興味をそそるような要因のために、本来の治療目的と同時に、彼らを科学的な実験の被験者にしてしまったことに対するごくわずかな非難しか残らないでしょう。（強調は原著者）（DW X）

シュレーバーはこの直前の箇所で、フレックシヒが知らないうちに神経の一部が抜き取られ、「試練を受けた魂」（神によって天界へと引き上げられた死者の魂）とされてしまった可能性について語っている。それならばとくに恨むことはないし、この手紙全体においても、彼はフレックシヒを非難したり、中傷したりする意図はない事を明確にしている。しかし、上記の、シュレーバー自身が強調している箇所は見逃せない。これではほとんど、フレックシヒによる人体実験が行われていたということではないだろうか。

ロターヌはフレックシヒが、シュレーバーの二度目の入院の際に、本人の意向を無視して彼に必要な治療—むしろ有害な投薬—を行ったことを批判するとともに、それをシュレーバーの記述の中に見出している<sup>38</sup>。シュレーバーはフレックシヒがすっかり別の人間のように変わってしまったことに絶望し、彼が「魂の政策（Seelenpolitik）」（DW 183, 265）に明け暮れ、患者を顧みなくなったと考えた。彼が二度目に入院した1893年の暮れは、フレックシヒが学長に就任する前年である。彼が患者を診るよりも、文字通り魂（＝神経学）をめぐる「政争」に明け暮れていたことを告発しているとも読める。

不当な治療を行い、患者の声に耳を貸さず、患者の生命すら軽んじるフレックシヒの姿勢に、シュレーバーは怒りを覚えていたのだろう。あるいは自分自身への処置だけではなく、彼が行っている不当な治療や人体実験—もちろん去勢手術を含む—について何かしら知っていたとも考えられる。このようなフレックシヒの自分自身に対する扱いへの不満と怒りから、シュレーバーは彼を「魂の殺害」の首謀者とみなすに至ったのだ。

しかしもう一つ問題となるのが、なぜ、シュレーバーが「試練を受けた魂」、すなわち自らの妄想の中でのフレックシヒではなく、もう一人のフレックシヒ、つまり『回想録』冒頭の公開質問状の名宛人に対して、「私はいかなる個人的な敵意も、枢密院顧問官医学博士フレックシヒ教授に対していだいていないことはわかっています」（DW 445）と述べているのか。なぜ、シュレーバーは現実のフレックシヒと区別される、魂としてのフレッ

クシヒの存在の可能性を認めざるを得ない (DW 447) と考えているのだろうか。そこには、シュレーバーではなく、フレックシヒの病が関係してくる。

既に述べたように、フレックシヒには躁鬱気質があり、そのために仕事で輝かしい成果をあげる一方、無気力状態になったり、怒りっぽく粗暴になったりすることもあった。シュレーバーは、ヴィジョン (外から与えられる幻影) の中でフレックシヒとその妻のやりとりを目撃している。

…フレックシヒ教授は、彼の妻に向かって「神なるフレックシヒ」と名乗ったので、夫人は彼が気が触れたのではないかと考えがちであった。(DW 82)

フレックシヒが繰り返し精神の変調をきたしている様子を、シュレーバーは見ていたのかもしれない。そのためにシュレーバーは、フレックシヒが、生きながらにして神との神経接続を結び、死者の国である天界に参入することになったと考えたのだろう。というのも、シュレーバーが、神経接続によって神と直接的に結び付けられ、世界滅亡の後も一人で生き続けるという運命をたどることになった要因は、彼の神経衰弱であると『回想録』には書かれている。人間世界に蔓延する神経衰弱は、神と人間、および他の被造物との関係を狂わせたと、シュレーバーはいうのだ。そして、そのなかで、フレックシヒおよびその一族のように、神経に関して特別の知識を持つ人々は、生きながらにして神の神経接続を利用することができるようになったのだという。フレックシヒには、シュレーバーも認めているように非常に優秀な神経科医という側面のほかに、「神なるフレックシヒ」を自称する、狂えるフレックシヒというもう一つの側面も存在していた。そのような不安定さあるいは、人間としての統一性の危うさを眼にしたシュレーバーは、彼の中に自分と同種の人間、有能だが神経を病んでいて、神の神経を引きつけざるを得ない人間を見出したのである。だがシュレーバーと異なり、フレックシヒは専門知識を有する神経解剖学者である。そのために、フレックシヒは、シュレーバーによって、神経接続を不当に利用し、彼を迫害する人物とされることになったと考えられる。

そのように考えれば、『回想録』後半においてフレックシヒが登場しなくなったことも、また、公開質問状にあるように、「試練を受けた魂」としてのフレックシヒと現実のフレックシヒを区別するということも納得できる。つまり、前者に関しては、1894年6月にライプツィヒを発ったシュレーバーは、ピーアゾン博士の施設を経由して、ゾンネンシュタインに入院する。そしてそこで一定の年月を過ごすうちに、フレックシヒの彼に与えた「魂の殺害」(不当な治療と人体実験の不安)は徐々に影響力をなくすようになったのだろう。そして現実のフレックシヒに対する恨んでいないという感情は、彼の性格的な変化が、循

環的な性質の、一時的なものであることを理解していたからだと考えられよう。

## おわりに

本論稿では、以上のようにシュレーバーの『回想録』における迫害妄想について、父親および主治医の影響を、実際の資料から考察した。ここから見てくるのは、シュレーバーの『回想録』がもつ、言説の複層性、あるいは奥行きである。『回想録』は決してひとりの病的な人物の妄想によって書かれた著作ではない。そうではなく、シュレーバーが吸収した自然科学や医学の最新知識、そして一父やフレックシヒのように一自分の回りにいた人物の発したさまざまな言葉から成立していることが分かる。シュレーバーの世界には、「揺らぎ」が存在する。人格神と進化論的な自然観<sup>39</sup>、唯物論と靈魂不滅説、近代と前近代といった具合に、彼が生きていた19世紀末から20世紀初頭の時代において、科学技術の進歩とそれとともなう社会の変化のなかで、つねに行ったり来たりと揺らいできた二つの極が、彼の記述する言葉の中にも反映している。本稿で取り上げた迫害の問題にしても、父の教育、フレックシヒの医学、そして躁鬱気質のように、シュレーバーを囲む人物の中にある「揺らぎ」は、彼の『回想録』にも大きな影響を及ぼしていることが分かる。

## 注

- 1 テキストは、Schreber, Daniel Paul: Denkwürdigkeiten eines Nervenkranken. Gerd Busse (Hrsg.), Psychosozial Verlag, Gießen, 2003. を使用する。引用は（DW ページ数）と表記する。
- 2 シュレーバーは、1884年10月末ケムニッツ近郊のゾンネンベルクで療養し、12月8日にライプツィヒのフレックシヒの元を訪れ、1885年6月1日までの6ヶ月入院した。二度目の発病のさいには、1893年11月21日にライプツィヒ大学精神科に収容され、1894年6月末までを過ごした。その後12日間リンデンホーフにあるピーアゾン博士の施設で過ごした後に、ピルナのゾンネンシュタイン精神病院に入院することになる。『回想録』書かれた合計9年半余りの入院生活の中で、フレックシヒのもとで過ごした期間は、上記の半年ずつ、合計1年程度ということになる。Vgl. Baumeier, Franz: The Schreber Case. In: International Journal of Psycho-Analysis. 37:61-74. 1956, p. 61-63, Israëls, Han: Schreber Father and Son Madison (International University Press) 1989, p. 163.
- 3 Freud, Sigmund: Psychoanalytische Bemerkungen über einen autobiographisch

- beschriebenen Fall von Paranoia (Dementia Paranoides): In: Studienausgabe Bd. VII. Frankfurt am Main (Fischer) 1973, S. 172.
- 4 Freud, a.a.O., S. 175.
- 5 フロイトは注のなかで、シュレーバーの父親についての情報を得たことを述べているが、家族構成や兄弟の存在、そしてバウル・シュレーバー本人の生活史（妻はたびたび流産しており、夫婦には子供がなかったこと）については知らなかったようだが、実際にシュレーバーには、梅毒による錯乱状態に陥ってピストル自殺した兄がいた。Vgl. Freud: a.a.O., S. 176.
- 6 Niederland, William G.: Schreber: Father and Son. In: Psychoanalytic Quarterly. 28: 151-169. 1959, p. 157.
- 7 シャッツマン、モートン（岸田秀訳）：魂の殺害者 教育における愛という名の迫害（草思社）1975年、70 - 71 頁。
- 8 Schreber, Daniel Gottlob Moritz: Ärztliche Zimmergymnastik. Leipzig 1894, S. 13.
- 9 モーリツ・シュレーバーは、*Gartenlaube* 誌に寄稿したエッセイの中で、屋外での遊戯の重要性を論じている。遊戯とは、子供の健康的な身体の育成に役立つだけでなく、他の子供たちとの遊びのなかで、社会性を身につけ、ひいては国防力の強化にもつながると述べている。Vgl. Schreber, D. G. M.: Die Jugendspiele in ihrer gesundheitlichen und pädagogischen Bedeutung. In: Gartenlaube. 26. S. 414-416. 1860, Allgemeine Wehrkraft als Aufgabe der Volkserziehung. Eine Anspruch an deutsche Stammgenossen. In: Gartenlaube. 18. S. 278-281. 1861 彼の考えは、シュレーバーの信奉者の、E. I. Hausschild によって 1864 年に最初のシュレーバー協会が設立され、翌 1865 年には、ライプツィヒ近郊に最初の庭園が開設されたことで具現化した。
- 10 Schreber, D. G. M.: Kallipädie oder Erziehung zur Schönheit. Leipzig (Fleischer) 1858, S. 220.
- 11 Israëls: p. 87.
- 12 Neuendorff, Edmund: Geschichte der neueren deutschen Leibesübung. Bd. IV. Dresden (Willhelm Limpert) 1932, S. 44.
- 13 Israëls: p. 64.
- 14 Vgl. Lesky, Erna: Die Wiener Medizinische Schule im 19. Jahrhundert. Graz / Köln (Hermann Böhlaus Nachf.) 1965, S. 338.
- 15 心身の虚弱から大学の職を辞していたニーチェもこの体操を実践し、身体の増強に努めたという。Käser, Rudolf: Arzt, Tod und Text. München (Fink) 1998, S. 193.

- 16 Israëls: p. 240, 250.
- 17 「先ほど言及した事態において、とくに興味深かったのは、ユーリウス・エーミール・ハーゼの魂が、彼の人生の中で会得した科学的な経験によって、医学的な助言を与えることもできたということである。私の父についても、私はこの機会に付け加えておきたいのだが、ある程度事情は同じであった。」(DW 96)
- 18 ハインロートは、1806 年に中欧で最初にアカデミックな精神医学の講義をライプツィヒ大学で始めた人物である。彼は精神病の原因を「罪責感」であるとして、ある種の力動的な心理学を構想していた。エレンベルガー、アンリ（木村敏・中井久夫訳）：『無意識の誕生－力動精神医学発見発達史（上）』（弘文堂）1980 年、251 頁。
- 19 Lothane, Zvi: In defense of Schreber: soul murder and psychiatry. Hillsdale (Analytic Press) 1992, p. 205.
- 20 Flechsig, Paul Emil: Die körperlichen Grundlagen der Geistesstörung. Leipzig (Veit) 1882, S. 4.
- 21 ショーター、エドワード（木村定訳）：『精神医学の歴史 隔離の時代から薬物治療の時代まで』（青土社）1999 年、105 頁参照。
- 22 Busse, Gerhard: Schreber, Freud und die Suche nach dem Vater. Über die realitätsschaffende Kraft einer wissenschaftlichen Hypothese. Frankfurt am Main/ Bern/ NewYork/ Paris (Peter Lang) 1991, S. 288.
- 23 たとえば心理学者エーミール・クレペリンは、1882 年 2 月からフレックシヒのもとで助手をつとめていたが、いわれのない非難を浴びせられ、とるに足りない理由で同年 6 月に解雇通告を受けている。Ebd, S. 299.
- 24 Ebd, S. 306.
- 25 Busse: Schreber und Flechsig: der Hirnanatom als Psychiater. In: Medizinhistorisches Journal. 24: 261-305. Stuttgart 1989, S. 288.
- 26 Flechsig (1927): S. 28.
- 27 Flechsig: a. a. O.
- 28 ニーダーランドは去勢手術についての論文をシュレーバーも読んでいて、それが不安を引き起こしたと考えている。Niederland: Schreber and Flechsig—A Further Contribution to the “Kernel of Truth” in Schreber’s Delusional System. Journal of the American Psychoanalytic Association, 16 (1968): 740-748, p. 746. しかしロターヌも指摘するように、それはやや性急な解釈である。ブッセによれば、フレックシヒにかぎらず、去勢はヒステリーの治療としてこの時代広く行われており、他の研究論文にも去勢手術の実例が多く挙げられていたという。Vgl. Lothane (1992): p. 212,

- Busse (1991): S. 303.
- 29 Baumeier: Der Fall Schreber. In: Denkwürdigkeiten eines Nervenkranken. Frankfurt a.M (Syndikat/ Eva) 1985, S. 342.
- 30 Busse (1989): S. 283, ショーター：前掲書、105 頁。
- 31 シュレーバーが二度目にフレックシヒの病院を訪れた際、彼は自分が「脳軟化症」— 神経梅毒の後期症状としての—を患っているとはっきり述べたことが、カルテに記録されている。この当時はまだ不治の病だった性病の進行への不安を考慮に入れて『回想録』を読めば、シュレーバーがいう一連の「奇跡」が新たな意味を示すようになる。ブッセも指摘するように、例えば「胸部締め付けの奇跡」と呼ばれる「胸郭全体が押しつぶされるような症状」(DW 151) は、梅毒の「締め付けられる感じ (Gürtelgefühl)」と非常によく似ている。」他にもブッセはシュレーバーが訴える身体的な痛みを、梅毒の典型的な症状と結びつけている。Busse: Berufen, die Welt zu erlösen: Hundert Jahre Denkwürdigkeiten eines Nervenkranken von Daniel Paul Schreber. In: Schreber, Daniel Paul: Denkwürdigkeiten eines Nervenkranken. Gerd Busse (Hrsg.) Gießen 2003, S. 556.
- 32 シュレーバーとフレックシヒの用語における一致については、Stingelin, Martin: Psychiatrisches Wissen, juristische Macht und literarisches Selbstverhältnis: Daniel Paul Schrebers Denkwürdigkeiten eines Nervenkranken im Licht von Michael Foucaults Geschichte des Wahnsinns. in: Scientia Poetica. Jahrbuch für Geschichte der Literatur und der Wissenschaften 4 (2000), Danneberg, Lutz/ Schmidt-Biggemann, Wilhelm/ Thomé, Horst/ Vollhardt, Friedrich (Hrsg.) Tübingen (Max Niemeyer) 2000, S. 299 を参照。
- 33 シュレーバーにおける自然科学および心靈主義の影響については、熊谷哲哉：「光線としての言葉—シュレーバーと自然科学と心靈学—」、京都大学大学院人間・環境学研究科現代文明論講座文明構造論分野『文明構造論』第1号、2005年、23-46頁所収を参照。
- 34 Flechsig: Gehirn und Seele. Leipzig (Veit & Comp) 1894, S. 10.
- 35 Flechsig: Meine Myelogenetische Hirnlehre: mit biologischer Einleitung. Berlin (Springer) 1927, S. 8.
- 36 Stingelin: a. a. O.
- 37 フレックシヒは神から奪いとった光線を貯蔵し、それらを「光り輝く光線の衣服」(DW 114) として身に纏っていたという。光線すなわち言葉を集め、衣服のように身にまとうというのは権力の顕在化した状態と考えられる。

- 38 Lothane (1992): p. 457. また、シュレーバー自身のなかにも、彼が「フレックシヒ療法」のようなショック療法を受けていたこと窺われる。「振り返って思えば、あのとき、はじめに私の神経性の鬱をどん底というところまで悪化させ、それから突然の気分の急転によって、一気に治療しようというのが、フレックシヒの治療計画だったのではないだろうか。」(DW 40)
- 39 シュレーバーにおける世界観の問題については、熊谷哲哉「目的・進化・自由意志—シュレーバーにおける世界認識の問題—」：日本独文学会京都支部会『Germanistik Kyoto』、第9号、2008年、21-38頁所収を参照。